

2022年度第38回電気通信普及財団賞

(テレコム人文学・社会科学学生賞、テレコムシステム技術学生賞、テレコム学際研究学生賞)

対象研究論文募集要項

1. 電気通信普及財団賞の趣旨

大学の学部若しくは大学院の修士課程又は博士課程に在学中に行った情報通信の普及、発展、振興に関わる研究に関する研究論文等を、テレコム人文学・社会科学学生賞（人文学・社会科学分野）、テレコムシステム技術学生賞（技術分野）及びテレコム学際研究学生賞（両分野にわたる研究）として表彰します。

学生賞は学生個人の功績を鑑み、授与されるものです。審査に当たっては、応募論文の質を第一優先に考えますが、付加的要素として論文に対する学生の貢献度と学会発表などの実績などが考慮されます。

2. 電気通信普及財団賞表彰応募の対象¹

(1) 表彰部門及び対象となる研究論文

① テレコム人文学・社会科学学生賞

大学の学部若しくは大学院（修士課程又は博士課程）に在学中に、情報通信の普及、発展、振興について人文学・社会科学の観点から実施した研究をとりまとめた論文をもとに、受賞者を決定します。※※

② テレコムシステム技術学生賞

大学の学部若しくは大学院（修士課程又は博士課程）に在学中に、情報通信の普及、発展、振興について技術的、工学的観点から実施した研究をとりまとめた論文をもとに、受賞者を決定します。※※

③ テレコム学際研究学生賞

大学の学部若しくは大学院（修士課程又は博士課程）に在学中に、情報通信に関する人文学・社会科学分野と技術分野の両分野にわたる研究を実施してとりまとめた論文をもとに、受賞者を決定します。

※ テレコム学際研究学生賞は、人文学・社会科学学生賞やシステム技術学生賞には応募しづらい中間領域のテーマや、技術の社会実装における政策課題、社会的に認知されていない課題を問題提起するよう

¹ こちらは学生賞の募集要項です。本賞（財団賞）については別途応募要項がありますので、本賞応募要項 URL : <https://www.taf.or.jp/award/>をご覧ください。

な研究テーマの応募も期待するところです（別添「電気通信普及財団賞 テレコム学際研究賞の応募テーマ例」を参照してください）。

(2) 応募の対象者

大学の学部若しくは大学院（修士課程又は博士課程）に在学中に研究内容を取りまとめ、学会などに論文を投稿した学生を対象とします。投稿時に在学中であった論文が対象であり、卒業・修了後に投稿した論文は対象外です。また、応募時において在学中か、卒業・修了後1年未満であることを要します。

(3) 表彰金及び件数

各学生賞について、

- ① 入賞 10 件以内（賞金各 50 万円）
- ② 奨励賞数件程度（賞金各 30 万円）
- ③ きわめて優れた著作・論文等に対する特別賞（1 件につき 80 万円以上）を授与します。

3. 募集期間

2022 年 6 月 1 日～2022 年 9 月 30 日午後 5 時まで

4. 応募方法

電気通信普及財団賞に研究論文、著作等を応募される方は、事前エントリーして、受付番号を取得したうえで、必要書類を以下の要領で電気通信普及財団賞事務局あてに提出してください。

(1) 必要書類

- ① 応募用紙（PDF の改変不可）
 - ・ テレコム人文学・社会科学学生賞
 - ・ テレコムシステム技術学生賞
 - ・ テレコム学際研究学生賞

（注）該当する応募用紙に必要事項をご記入の上、PDF 版の応募用紙を専用ページ（<https://www.icr.co.jp/taf/entry.html>）から事前エントリーし、受付番号を取得してください。

- ② 応募作品（論文）2 部
- ③ 本文要旨（800 字以内、様式任意）
- ④ 推薦書（テレコムシステム技術学生賞及びテレコム学際研究学生賞は必須。テレコム人文学・社会科学学生賞は応募学生以外の共著者がいる場合において必須）

※ 推薦者の了解を得ている場合は、押印省略可とします。その場合、財団事務局より推薦者に連絡の上、推薦意思を確認します。

- ⑤ 応募者の既発表論文リスト（テレコムシステム技術学生賞のみ）
- ⑥ 採録通知（掲載予定の論文の場合）

(2) 提出方法

・事前エントリー後、下記あてに郵送してください。（宅配便は不可）

【郵送先】〒103-0013

東京都中央区中央人形町二郵便局留

電気通信普及財団賞事務局 受付番号××-××× (注)

(注) 上記(1)①で取得した受付番号を記載してください。

※ テレコムシステム技術学生賞及びテレコム学際研究学生賞に応募される方は、必要書類を郵送するほか、当財団の電子申請システム (<https://taf.yoshida-p.net>) にアクセスの上、マイページを取得し、応募書類の PDF ファイルを提出してください。

5. 選考結果

2023年3月に受賞者の方に通知し、当財団のホームページ等に掲載します。

6. その他

- ① 受賞者には、当財団のホームページ等への掲載のための情報提供や、当財団主催のイベント等における受賞著作/論文に関するプレゼンテーションなどのご協力をいただきます。
- ② 応募に関し記載された個人情報については、法令及び当財団の内部規程に従い、適切に取り扱います。
- ③ 受賞者の氏名、研究論文、著作等の名称、賞金額について一般に公開します。また、これらの受賞に関する情報を公益財団法人助成団体センターに提供します。
- ④ 応募書類及び研究論文、著作等は返却しません。
- ⑤ 応募に際しては、応募時及び論文投稿時の著作者の所属、役職、学年を応募申込書の所定欄に記載していただきます。

【お問い合わせ】

電気通信普及財団賞事務局（土日祝は休業となります）

電話：03-3663-8024（受付時間：平日 10:00～17:00）

お問い合わせフォーム：<https://www.taf.or.jp/contact/>

e-mail：tafcontact(at)icr.co.jp（at）を@に変更してください。

※ 電気通信普及財団賞の事務局運営に係わる業務は、株式会社情報通信総合研究所に委託しております。

(参考)

2021年度第37回電気通信普及財団賞

<https://www.taf.or.jp/award/2021-37th-application.html>

(別添) 電気通信普及財団賞 テレコム学際研究学生賞の応募テーマ例

テレコム学際研究学生賞は、2021 年度に創設されたまだ若い賞です。テレコムシステム技術学生賞やテレコム人文学・社会科学学生賞には応募しづらい中間領域のテーマや、技術の社会実装における政策課題、社会的に認知されていない課題を問題提起するような文理融合領域における研究テーマの応募を期待するところです。

人文学・社会科学研究分野内の学際研究、システム技術研究分野内の学際研究については、各々、テレコム人文学・社会科学学生賞、テレコムシステム技術学生賞にご応募ください。

テレコム学際研究学生賞の研究例としては、第 37 回電気通信普及財団賞テレコム学際研究学生賞の表彰の対象になりました研究のテーマと審査員からのコメントが参考になると思います。

～研究のテーマ～

「Cooperation patterns of members in networks during co-creation」

本論文は、オンライン上の共創活動による小説創作では、創造的役割は周辺メンバーが、その修正の役割を中心メンバーが持つことを 3 つのデータセットを用いて明らかにした。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) によるテレワークの作業効率が問題になっている折、オンラインの共同作業での役割分担を明確にしたという点でタイムリーであり、社会の求める研究成果である。学生はデータ収集、分析など中心的役割を果たし、論文発表等アクティビティも高く、テレコム学際研究学生賞の最優秀賞に値する。

「Emotion-involved human decision-making model」

本論文は、感情ダイナミクスを組み込んだ新たな意思決定モデルを提案し、感情によって非合理的な行動を選択する要因を分析することで、非合理的な行動選択の回避策について論じている。実際の裁判記録を集め、提案モデルによって非合理的な行動を説明している点を評価する。今後はより多くの事例を解析することが望まれる。

「Finding and Generating a Missing Part for Story Completion」

本論文は、ストーリーのどこに欠落があるかを予測し、文章を補完する深層学習手法を提案している。小説の執筆活動の創作支援という観点から書かれた論文で着眼点は独創的であり、論文としての完成度も高い。欠落文書の位置推定や欠落している文書の補完についてともに不十分であり、得られた成果は直ちに有用であるとまでは言えないが、学際研究としての意義は大きい。

「知識構築活動におけるアイデア向上プロセス分析に基づく学習成果を向上させる条件」

本論文は、アイデアという抽象的な概念について、Problem-based Learning (PBL)に参加した大学生のノートに基づいてアイデア向上のプロセスを分析し、アイデア向上と学習成果を上げる3条件を明らかにした点、またその際、学生同士の対話音声について定性分析も行っている点が評価できる。まだ限定的な状況の下での結果であること、分析・評価手法の一部に関して主観的な部分が見られることは今後改良すべき点と思われる。

「アルゴリズムの判断はいつ差別になるのか—COMPAS 事例を参照して」

アルゴリズム差別はAIの重要課題として注目を集めている。本論文は、技術倫理の側からではなく倫理学の規範理論を適用し、具体的には人種的バイアスが議論になったCOMPAS(アメリカの再犯リスク評価プログラム)について検証を行い、個人の尊厳に反するような表現を提示することで道徳的に不正な差別を行っていることを示した、挑戦的かつレベルの高い学際的研究である。今後は他の事例にも取り組まれ、研究の深化・発展に期待する。